

## 『魏志倭人伝』の読み方について

吉原賢二

『魏志倭人伝』は陳寿編纂の中国史書『三国志』の一部である。中国公式の史書として重んじられてきた。古代日本—倭国についての貴重な情報が述べられているので、日本古代史に関心のある人々にとってその存在は大きいものである。もちろん記事はすべて正しいというわけではなく、伝聞など確認のしようのないものが混じっていることは否めない。しかし一読してすぐ論理矛盾と分かるような愚は犯すはずはない。陳寿ともあろうものがそんな馬鹿なことをやるはずはないからである。

従来から日本の古代学者の間で問題になっている耶馬台国の所在について考える。北九州にあったとする説と近畿にあったとする説が対立している。

北九州説のもっとも重要な根拠は中国魏の役所のあった帯方郡からの距離である。全体で一万二千里とあり、途中の不弥国までの合計が一万八百里余り、したがって残り一千二百里ほどになる。(注1) その文章に続き、日程表示で水行二十日の投馬国、水行十日・陸行一月の「邪馬台国女王の都するところ」に至る。そんな長旅なら北

九州をはみ出るし、全体の距離一万二千里に収まりそうもない。そこで放射状説が登場し、後の部分は途中の伊都国を起点に放射状に日程を記したとするのが定説化した。こうすれば北九州に本拠があって、のちに近畿に行ったことが説明できる。

それに対して近畿派は北九州のあと水行十日・陸行一月で卑弥呼の都につくから、邪馬台国は近畿にあったと考える。ここで一万二千里の距離は無視されるか、あてにならないもととされる。さらに中国では古くから日本列島が九州から南にのびているとされてきたので、その誤りを正して東に進むと考えた。

近畿派の弱点は距離を無視したことである。いろいろ研究がおこなわれ古田武彦は当時の距離表示が一里＝約八十メートルの短里によっていることを示した。これによると途中までの行程はよく説明できる。『三国志』の編集者は短里を採用したのである。その編集者が不弥国からの残りの距離千二百里を「水行十日・陸行一月」とするのはあきらかな論理矛盾で、そんなことはすぐ気付くはずだ。あり得ないことである。この程度の算術のできない人が中国の公式記録の編纂にあたることはあるはずがない。

「南至る邪馬台国女王の都するところ、水行十日陸行一月」

と述べられているのは北九州の首都の他に近畿に副都（的なもの）があったと見ているのである。中国ではそういう例はいくつかあった。

邪馬台国は倭国統一過程にあり、銅鐸民族を征服途中で、戦争はしばしば起こった。征服地に副都ができたのである。派遣した将軍（あるいは卑弥呼の子孫）は女王のために銅鐸民のド真ん中に立派な都（副都）を作り、女王の偉大さを知らしめた。こう解するのがもっとも自然である。

卑弥呼は韓国史書『新羅本紀』によれば AD173 年に新羅に使いを出した。彼女は AD248 年ころ亡くなったのでその統治は 75 年以上の長期間に及ぶ。彼女は「鬼道につかえよく衆を惑わす」と『倭人伝』〈注2〉にあるように、シャーマンの存在であった上に絶対君主のように君臨したのであろう。神秘的な人心収拾を確立したと言えるのではなかろうか。この女王のためには命を惜しまず何でもする狂信的ともいえる軍隊もできたであろう。後に「大君の辺（へ）にこそしなめ」という歌ができるほどであった。

現実には彼女は女王としていち早く魏の皇帝に使いを出し、「親魏倭王」の金印をもらった。当時として絶大な権威のしるしであった。

このようなことから近畿に副都ができて卑弥呼の権威を輝かした。卑弥呼がここに滞在したことがあったかどうか今後の解明すべき課題である。しかし首都は間違いなく北九州にあったのである。首都は一つと思いこんだ日本の古代学者に盲点があったのである。

以下補足事項について二三述べる。

(1) また卑弥呼から派遣された将軍はだれかの問題について。

日本書紀には出雲へ遣わされたには武御雷命である。ここで有名な大国主命の国譲りが実現する。そして大和には饒速日命が行っている。卑弥呼は天照大神のモデル以外考えられない。天照大神の孫とされる饒速日はその命に従って大和征服に出発し、成功した。卑弥呼の晩年と見てよいだろう。

(2) 神武東征はなぜ必要だったかについて。

すでに饒速日が大和を征服したのだから、神武がまた大和に東征軍を引き連れてゆく必要はないはずである。しかし事情があったに違いない。日本書紀・古事記ともその事情を明記していない。記事をよく読めばそれは推察できる。饒速日は地元民と融和する政策を取り、

豪族の長髓彦の妹の御炊屋姫を娶った。正妃天道日女命をかえりみ

なくなった。死の前に正妃の息子高倉下ではなく、御炊屋姫の生んだ宇麻志麻治命を後継者に指名した。長髓彦はますます増長し思うがままに振る舞った。これは九州の邪馬台国連合にとって許すべからざることであったに違いない。神武の東征を支持したのである。こうして神武は兵を引き連れ、船団を組んで大和に侵入しようとしたのである。しかし長髓彦の抵抗にあい、一度は失敗し、迂回して攻撃を再開、奇襲して長髓彦を打ち破った。この時饒速日の息子の高倉下は

神武に味方した。もちろん長髓彦のやり方に不満だったばかりでなく、自分が饒速日の後継者に指名されなかった不満もあったであろう。こんな後継争いは古今東西よく見られる現象である。神武にとって饒速日の王朝に取って代わる口実となったと見られる。こうして饒速日の事績は消えてしまい、饒速日は歴史からほとんど消えてしまった。日本書紀・古事記とも饒速日のことはタブーのようになってしまった。しかし饒速日が都したと考えられる桜井郷（纏向地区を含む）の遺跡—立派な建物跡や箸墓古墳の存在を思えば、饒速日の事績はもっと記録されることが必要だった。

〈注1〉 不弥国が現在のどこかは不明である。奴国は博多湾沿

岸那珂川の辺りかも知れないので、ここを起点とすると、邪馬台国まで百里遠くなるが、大勢に影響はなく、北九州をはみ出ることはない。

〈注2〉 卑弥呼の祭儀を魏の使は実際に見たに違いない。「鬼道」とはかなり強烈な違和感を覚えたということである。つまり普通の言葉でいうと「気違いじみた宗教祭儀」ということである。「人を惑わす」も宗教祭儀に託して神命を集団的に認めさせ、一体として行動させることである。大真面目の行動もその宗教に属しない人にとっては馬鹿げたことだが、魏の使はそれ以上干渉はしなかった。